

2017年度終了 重点領域研究(テーマ)一覧

所属	職	氏名	研究テーマ 等 ※課題名をクリックすると該当する研究課題の研究成果報告書のページヘジャンプします。
学校教育学科	教授	田中昌弥	「多様な子どもと創る教育実践」を行う教師の資質・能力の研究 －授業づくりと子ども理解の往還によるアクティブ・ラーニングの課題克服を通して－ 【研究期間：2016-2017年度】
学校教育学科	教授	鳥原正敏	Ictを活用した横断的な教育システムの構築についての研究 －「たからばこ作戦」の継続ともづくり工房設置に向けて－ 【研究期間：2016-2017年度】
英文学科	教授	大平栄子	日本語英文学研究 －翁久允の視点を参考にして 【研究期間：2017年度】
英文学科	教授	中地 幸	西洋モダニズム文学におけるアジア文化・芸術の役割 【研究期間：2016-2017年度】
情報センター	准教授	日向良和	地域情報のデジタル化と発信Wikipediaタウンの開催 【研究期間：2017年度】

平成 28・29 年度 学術研究費等交付金 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 31 日

研究者	氏名： 田中 昌弥 (研究代表)		職位：教授
	所属(学科等)：学校教育学科(初等教育学科)		
研究課題名	「多様な子どもと創る教育実践」を行う教師の資質・能力の研究 ー授業づくりと子ども理解の往還によるアクティブ・ラーニングの課題克服を通してー		
研究年度	平成 28 年度 から		平成 29 年度まで
研究費の種類	重点領域研究	交付額	1,399,961 円
研究費の種類		交付額	円
研究概要等			
【研究概要】 重点領域研究のうち「大学の授業改善に関する研究領域」について上記課題による共同研究を行った。研究代表以外の共同申請者は、本学において教育学と各教科教育学を担当する下記の教員であった。 岡野恵司、春日由香、加藤優、上原明子、清水雅彦、十川菜穂、竹下勝雄、堤英俊、鶴田清司、寺川宏之、鳥原正敏、中井均、平野耕一(以上、初等教育学科(当時))、宮下聡、山崎隆夫(以上、教職支援センター)。 次期学習指導要領作成の審議過程で柱とされた「アクティブ・ラーニング」は、授業者が形式的に理解すると授業形態の固定化や「学力低下」といった問題につながる弱点をもっている。中教審と文科省もこれを危惧し、概念を「主体的・対話的で深い学び」に変更したが、具体的にはアクティブ・ラーニングとして実施されることになるため、その課題を克服した教育実践を行う素養を学生にいかに育てるのか、大学における教員養成として検討する必要がある。 本研究では、本学の教員養成の特徴に鑑み、特に「子ども理解」を重視することでアクティブ・ラーニングの課題を乗り越える実践を行っている現場教師の方々をお招きして講演会やインタビューを行い、その内容について検討を行った。そのうち 12 本は下記の報告書に収録したが、これは優れた教師たちの実践を知ることのできる貴重な資料といえる。検討の結果は、取りあえず計 13 本の論文としてまとめたが、資料にはそれに尽きない内容が含まれており、継続的な研究の対象となりうるほか、専門演習などの教材としても活用できる。 【学会発表、書籍収録等】 重点領域研究報告書『授業づくりと子ども理解の往還によるアクティブ・ラーニングの課題克服 ー「多様な子どもと創る教育実践」を行う教師の資質・能力の研究ー』平成 30 年 3 月			

ここをクリックすると、一覧に戻ります！

平成 28～29 年度 学術研究費等交付金 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 21 日

研究者	氏名：鳥原正敏	職位：教授	
	所属(学科等)：学校教育学科		
研究課題名	I C Tを活用した横断的な教育システムの構築についての研究 ー「たからばこ作戦」の継続と「ものづくり工房」設置に向けてー		
研究年度	平成 2 8 年度 から	平成 2 9 年度まで	
研究費の種類	重点領域研究	交付額	4,490,000 円
研究費の種類		交付額	円
研究概要等			
【研究概要】 1. 研究目的 新学習指導要領では学習者主体の学びが特に重要である。またそこでは、様々なリソースやテクノロジーを活用しながら考えたり、課題解決にアプローチしたりする態度が大切である。これを踏まえ、大学には、学生が“面白い”と感じたことを通して学内外、学科を超えた人的ネットワークを構築するなどの経験を通して、課題解決能力を育むことが求められている。また未来の社会において、ICT の活用は最も重要なスキルの一つになると思われる。 これを踏まえ、ICT の活用に積極的に取り組むことを目標に掲げる初等教育学科において、試験的に実践活動を始める事とし、これまでの活動実績から、図工・美術教室と情報センターの連携による「図画工作における ICT を活用した新たな活動概念（たからばこ作戦の実践をとおして）」の活動は科研費採択になっているものの、新規分野に向けての活動展開についても、今回の取組みにおいても継続的に研究することが必要である。 また、本重点領域研究交付金を活用して、美術棟 2 階に「もの作り工房：DIGITAL ずこうしつ」を設置することが出来た。ここでは、“ICT を活用したもの作り”をテーマに、新しい図画工作における教材研究や先進的な機器を活用したものづくりの実践を開始した。また活動に興味を持つ学生が、学科や学部を越えて集まり始めている。 2. 期待される効果 今や、デジタル機器やインターネット等の ICT は使えて当たり前、さらにこれを通して未来の学習環境を見通す力が求められており、文部科学省だけでなく、経団連や経済同友会からも大学教育への期待の中で、課題解決能力の育成が求められており、その取組みの中核として ICT 環境の充実が必須となっている。 現在の学部卒業生が教員として、例えば小学校に採用された時には、既にそこで学ぶ子どもたちと学生たちが過ごした小学校時代とは明らかに違う I C T 環境があるだろう。生まれた時から既に ICT 環境に触れていた『デジタル・ネイティブ世代』と呼ばれる子どもたちである。まして、20 年・30 年後の教育現場の状況はどのようなものか予測することは			

困難である。ただ言えることは、デジタルカメラや CD の普及と同じように、現在では特別なものであっても、その頃には当たり前のものであるということを、今、生きている私たちの過ぎ去った 20 年間、いや 10 年間だけを振り返っても十分理解できることである。

例えば、ICT 教育に積極的に取り組んでいる欧米諸国においても、3D プリンターやレーザーカッターが様々な教育現場において取り込まれ始めている。この一例は、これまで高等教育で利用されていたデジタル機器等が、小中学校においても利・活用されていくことを示唆していると考えられる。

学内への「ものづくり工房」の設置によって、本学のような文系大学の学生が、授業以外においても日常的にこのような環境に触れるなかで、他の学生や教員たちとの交流をとおして、更には留学生の参加も積極的に図ることにより、今後期待される課題解決能力向上や、グローバル人材の育成プログラムに寄与できるものであると考える。また、市内大学コンソーシアムによる多面的な連携・実践活動をとおして得られる成果も大きい。このように、ここに集う学生たちは、未来の世界や社会・地域をイメージしつつ新しい考えを持ち、提案が出来ることを期待できる。指導運営体制は、情報センター特任教授杉本光司（管理運営責任者）、初等教育学科教授鳥原正敏（総括責任者）、初等教育学科特任教授青木宏樹、特任准教授布山浩司が中心として関わり、情報ゼミ学生や図工美術ゼミ学生も日常的な運営に参加した。

【研究成果】

平成 29 年度は、当重点領域研究支援おける最終年度でもあり、本研究における一区切りの年として位置づけ、これまでの実践活動を継続すると同時に、“まとめ”としてカンファレンスを開催し、次の段階へとステップアップするための研究計画に反映させることを目標として行った。また、旭小学校における出張「デジタルずこうしつ」の実現により新しい活動の始まりを示すことが出来た。平成 29 年度における活動詳細は以下の通りである。

1. 実践活動

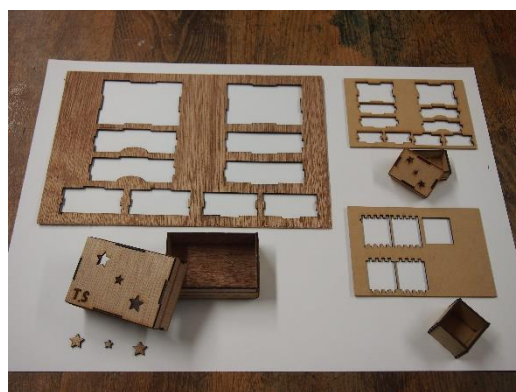
- 1) 平成 29 年 5 月 27 (土) ～28 日 (日) (杉本、鳥原) 西宮市 ギャラリー小さな芽
「子どもアトリエ」の年 1 回の展覧会である「さつき展 2017」への参加と作品の撮影、旭小学校の子どもたちとの交流プログラム計画、カンファレンスの開催及び今後の活動内容についての打ち合わせ。
- 2) 平成 29 年 6 月 14 日 (水) 16:00 (杉本) 都留市立旭小学校
こどもアトリエの作品 45 枚に対しての交流活動への参加のお願い。
- 3) 平成 29 年 7 月 25 日 (火) 14:00 (杉本、鳥原) 西宮市 こどもアトリエ
「たからばこ作戦」における、新たな一般公開用ミラーサイトを作成することになり、そのスタート画面におけるアイコンの種類やデザイン、そして公開時期や全体構想に向けて打ち合わせを行った。

- 4) 平成 29 年 8 月 8 日 (火) 13:00 (杉本、鳥原、大輪) デジタル図工室
トップ画面に配置する分類アイコンを利用した検索について、分類カテゴリーとして、「テーマの部」は、生き物、植物、食べ物、四季 (春夏秋冬)、人、乗り物、風景の 7 種、そして、色 (黄、青、紫、水色、ピンク、赤、緑) 7 種の 14 個のアイコンからスタートすることにし、全体の配置についての確認を行った。分類できない作品テーマについては、もう少し運用してから検討することを確認した。
- 5) 平成 29 年 8 月 17 日 (木) 10:00 (杉本、浅川校長、雨宮教頭) 都留市立旭小学校
6 月 14 日にお願ひした「こどもアトリエ」の作品に対する感想コメントを書いてもらうことを正式にお願ひした。
- 6) 平成 29 年 8 月 24 日 (木) 15:00 (杉本) 都留市立旭小学校
依頼書と一緒に、こどもアトリエの作品 45 枚とコメント用紙を届ける。
- 7) 平成 29 年 9 月 21 日 (木) 16:00 (杉本、鳥原、浅川校長、雨宮教頭) 都留市立旭小学校
コメント作成のお礼と今年度開催予定のカンファレンスへの出席のお願い。
- 8) 平成 29 年 9 月 27 日 (水) ~ 28 日 (木) 9:00~17:00 (デジタル図工室)
①データベースシステム「たからばこ」の全登録データの検証と新規項目追加作業
・参加学生：臼井佑美 (英文 4 年)、北原拓真 (社会 3 年)、味戸有紀 (英文 2 年)、浦野茜 (英文 2 年)、宗形星虎 (社会 1 年)、和田吉揮 (国際教育 1 年)
・データベース「たからばこ」への登録作品数：1294 件
・新規項目として「検索ワード (児童)」のデータ登録
【分類 1】テーマ 10 項目 (既存 7 + 新規 3)
・乗り物、食べ物、植物、人、生き物、季節、風景、学校でつかう、家でつかう、建物
【分類 2】色 7 項目
・赤、青、黄、ピンク、水色、緑、紫
「分類 1」から 1、「分類 2」から最高 2 を選択して登録する。
②映像ファイルの作成
・「旭小学校の 5 年生」が書いてくれたコメントと「こどもアトリエ」の作品 45 点を基に映像ファイルを作成した。今年度は、DVD スタートメニュー画面で 5 つのチャプターも表示し詳細化することにより、個々の作品を観易くすることにした。この DVD をこどもアトリエの上田由紀子さん、旭小学校にも届けて感想や要望を聞くことにした。
- 9) 平成 29 年 11 月 19 日 (日) 13:00~16:00 まちづくり交流センター会議室 2
『たからばこ作戦』カンファレンス 2017 の開催
出席者 (学外) :
岡田京子先生 (文部科学省)、上田由紀子さん (こどもアトリエ主宰者)、雨宮基弘先生 (旭小学校)、國年悦弘先生 (旭小学校)、流石先生 (本学非常勤講師)、永井孝さん (CMS コミュニケーションズ)
出席者 (学内) : 鳥原正敏、杉本光司、大輪知穂、加藤萌香 (大学院生)

カンファレンスにおける詳細については、29年度末に発行した『たからばこ作戦 研究報告書』に記載している。

10) 平成30年1月26日(金) 13:00～16:00 (杉本、鳥原) 西宮市 こどもアトリエ
平成29年11月19日(日)に開催した「たからばこ作戦に関わるカンファレンス」における発言のテープ起こし原稿が作成され、そのチェックや報告書作成についての話し合い、また今後の活動計画や目標等についての打ち合わせを行った。

2. 『デジタルずこうしつ』の設置と運用



← レーザーカッターを使った作品 ↑

美術棟2階A205教室を改修し『デジタルずこうしつ』を設置し運用を開始、『情報メディア演習Ⅱ』(担当:杉本)、『デザイン演習』(担当:青木)の授業でも機器を利用した作品造りを行った。

今年度は、新規にレーザーカッターと電子黒板を購入し、以下のICT機器を装備している。

- ・3Dプリンター:3台・レーザーカッター:2台・パソコン:6台・ドローン:2台
- ・3Dスキャナー:2台・プリンター:4台・タブレット端末:2台・電子黒板:1台

これら備品の一部(レーザーカッター、電子黒板:1台、3Dスキャナー、プリンター)は実際の授業やクロボなどの活動に導入、実践活用が始まっている

(1) 旭小学校における『出張デジタルずこうしつ』の実施

☆平成29年10月26日(木) 9:00～14:00 3Dプリンターの展示

これまでも旭小学校には図工美術教室との連携による「たからばこ作戦」プロジェクトのフィールドの一つとして積極的な協力を頂いてきた。そこで、今回は、大学のICT機器を使った、学校におけるものづくりの現場を映像ではなく、子どもたちに直接見てもらうことを企画し、これにより、今後の交流活動や創作体験のプログラム化に展開出来ることを目標としている。



1. プログラム

09:00～09:45	準備	サイコロのプリントスタート（1h）
09:45～10:30	2校時授業	
10:30～10:50	中休み	サイコロの完成、
10:50～11:35	3校時授業	雪だるまプリントのスタート（1h）
11:35～11:40	休憩	雪だるま完成
11:40～12:25	4校時授業	サッカーボールのプリント（1h）
12:25～13:05	昼食	
13:05～13:25	昼休み	サッカーボール完成
13:25～14:00	片づけ	

2. 展示物 場所：一階玄関前廊下周辺

① 3Dプリンター

造形物（サイコロ、雪だるま、サッカーボール 40mm 1時間程度で完成するもの）
展示物（児童対象に適切なもの数点）

② 「こどもアトリエ」の映像展示

こどもアトリエの子どもたちの作品に対して、旭小学校の5年生から寄せられたメッセージを組み込んだ映像ファイルを、デジタル・フォト・フレームを使って展示

3. 使用機器類

① MUTOH 製 3D プリンター 「MF-500」 1 台

② ノート型パソコン SONY VAI0 1 台

③ デジタル・フォト・フレーム SONY RMT-DPF8 1 台

4. スタッフ

教員：杉本光司、（鳥原正敏：学外研修プログラムの一環として）

学生：宗形星虎（社会学科1年）

ここをクリックすると、一覧に戻ります！

平成 29 年度 学術研究費等交付金 研究成果報告書

平成 30 年 3 月 31 日

研究者	氏名： 大平 栄子		職位： 教授
	所属(学科等)： 文学部 英文学科		
研究課題名	日本語英語文学研究 - 翁久允の視点を参考にして		
研究年度	29 年度 から		29 年度まで
研究費の種類	重点領域研究	交付額	589,070 円
研究費の種類		交付額	円
研究概要等			
【目的】 明治、大正、昭和初期において日本人による膨大な英語著作について「英語文学」として総体的に把握しようとする試みは皆無であった。それを同時代の世界の英語文学のコンテクストに位置づけることを目指すものである。その際、かれら英語著作家たちと同時代を生き、岡倉天心らと共通点を多く持つ翁久允の視点を導入することの意義を認め、翁久允研究の第一人者である米国大学の研究者である鳥本幾子氏との共同研究を通してその成果を世界に発信することを目指す。 【活動内容・成果】 本研究については、以下のような活動を行い、成果をあげることができた。 (1)Hawaii International Conference on Arts and Humanities において、翁について研究発表を行い、また、それに対する意見交換を他の研究者たちと行った結果について鳥本準教授に情報を提供していただいた。さらに、鳥本氏には、当地の研究施設において、鈴木大拙などについて、資料収集の協力を得られ貴重な文献を入手することができた。 (2) 上記の国際学会抄録への論文投稿（“OkakuraTenshin’s The White Fox in the Context of the Buddhist Reform Movement in the Meiji and Taisho Periods”）は審査の結果受理され掲載された（2018 年 1 月発行の Proceedings16）。仏教は 19 世紀のヨーロッパで発見されたと言われる。その仏教研究への熱狂により実証的研究が加速化された一方で、西洋的思考を超える未知の領域への恐れやオリエンタリズムによる否定的イメージが根強かった。このイメージの転覆・修正は新渡戸稲造、岡倉天心、野口米次郎、鈴木大拙ら多くの人々による日本紹介の優れた英文著作によってなされてきた。これらの英語文学作者たちによってどのようになされたかを、岡倉天心の未公開のオペラの台本 The White Fox に焦点化し、明治・大正・昭和初期の仏教改革との関わりの中で考察した。西欧仏教研究者・観察者による批判の背景には、仏教の「涅槃」を消滅と見る誤解に基づいている。大乘仏教を認めない視点に加え、こめ涅槃への誤解			

は、岡倉天心の英語著作によって反論が試みられているが、従来は『東洋の理想』や『茶の湯』などの著作に焦点が当てられ、オペラは研究対象にならなかった。だが、このテキストこそが、上記の誤解を解く物語の表象力を発揮するものであることを論じた。

(3)St Norbert College 訪問時において、延期になっていた上記の情報・意見交を直接行うことができた。同大学の鳥本氏所属の外国語研究科のセミナーにおいて、大平は岡倉天心の未公開オペラの台本という先行研究の極めて乏しい重要なテキストについて仏教改革との関わりで論じた研究成果を発表した。参加された英文学科所属の研究者および、フランス文学など外国語文学研究者と意見交換することができた。さらに、20世紀初頭に出版された岡倉天心の『茶の湯』への反響の大きさから、アメリカの学校において教科書として使用されたが、その詳細がまだ把握できないことを伝えたところ、それに関心を示して下さった英文学研究者の Edward Ridsen 教授や Laurie Mac Diarmid 教授らが調査協力を申し出て下さった。『碧岩録』の著作のある翁久允はまた仏教への関心も高く、ラビンドラナート・タゴールとの関係もあり、天心とは共通点が多いが、どのような具体的な関係にあったかについては一切関心の対象にならなかった。この点について情報・意見交換を行い、調査の課題等について確認できた。20世紀初頭のアメリカの移民社会の厳しい現実を描いた「移民地文芸」作家であり、日系新聞の記者であった翁に対して、ボストン美術館の東洋美術の責任者であり、ボストン上流社会の寵児で、A Book of Tea がアメリカで教科書として採用されるほど高い評価を受けた天心の日本文化発信の内容の差異について、さらに具体的に細部を検討することによって、日本英語文学概念の補強へとつなげていきたい。また、鳥本氏が来年の Sabbatical の時期にジェンダーの視点から翁研究を深めるために関連資料が多い UCLA において調査を行う予定になっているとの意向をうかがい、大拙、天心について、この視点からの比較研究を行う方向性も見えてきたことも付け加えておきたい。

共同研究者鳥本幾子 St Norbert College (北米)准教授

[ここをクリックすると、一覧に戻ります！](#)

平成 28～29 年度 学術研究費等交付金 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 20 日

研究者	氏名： 中地幸	職位：教授	
	所属(学科等)： 英文学科		
研究課題名	西洋モダニズム文学におけるアジア文化・芸術の役割」 (The Role of Asian Culture and Art in Western Modernist Literature)		
研究年度	平成 28 年度 から	平成 29 年度まで	
研究費の種類	平成 28・29 年度重点領域研究費 (国際共同研究)	交付額	1,500,000 円
研究概要等			
【研究概要】 共同研究者 杭州師範大学講師 陳敏 本研究は、アジアのモダニズムがどのように西洋の植民地支配の影響を受けながらも独自の様式を形成したか、また西洋モダニズムがアジア芸術をどのように受容しそれを取り入れていったかについて探ることを目的とするものであった。研究は美術と文学がどのように関連しながら発展したかを焦点を置いて行った。 研究経過 平成 28 年度から 29 年度にかけて行われた。西洋への日本美術の影響を考察するジャポニスム研究は、とかく西洋と日本という二つの領域だけで思考する傾向にあるが、この領域は複層的に考えられなければならない。共同研究者の陳敏氏は、この問題を考えるにあたって、テート美術館で展示されたラフェエル前派と写真との関係についての展覧会からアイデアを得て、絵画と写真の問題とジャポニスムを重ね合わせて論考をした。中地はフランスやイギリスが中心であるジャポニスムがどのように北欧で展開されたかについて焦点をあて、ムンクと浮世絵の関係について、オスローでの展覧会などで資料を集めながら考察した。また野口米次郎の俳句論の研究も陳氏と議論を持ちながら進めた。平成 29 年度はオランダを基盤として美術館・博物館での調査を行いながら、西洋芸術とアジア芸術の融合について考えた。陳氏はオランダでの調査の前にハーバード大学の主宰する世界文学のセミナーに参加し、新しい理論を学んできたので教えられるところが多かった。とりわけ、スタンフォード大学のスーザン・フリーダンの「惑星的モダニズム」の概念を取り入れ、裾野を広げた形でこの分野へのアプローチを行うことができた。9 月にオランダを基盤として美術館を精力的に訪問しながら、資料を集め、考察を行い、また 12 月に上海でも			

調査を行った。中地の研究は「惑星モダニズム」と『蝶々夫人』の関連から、20世紀のコリア系アメリカ文学の領域にまで及んだ。陳氏はヨネ・ノグチと関係の深いエズラ・パウンドとノグチの親友でもあった大英博物館のローレンス・ビニヨンについての論文発表を行った。国際共同研究により複層的にアジアとモダニズムの関係を考察することができたといえる。

研究成果

【論文】

- 1) Nakachi, Sachi, and Chen Min. “Looking into Exhibitions: Mimicry, *Japonisme* and Intermediality of Art.” 『都留文科大学大学院紀要』 21号 (2017年3月発行) 89-102頁
- 2) 中地幸「反転するまなざしーヨネ・ノグチの日本文学・文化論」『日本文学の翻訳と流通』 河野至恩・村井則子編、勉誠社、2017年 12月
- 3) 中地幸「メタモダニズムとトランスパシフィック・モダニティの時空——チャンネ・リーの『ジェスチャー・ライフ』におけるフォークナーへの逆行」 『フォークナー』 20号 (松柏社)、2018年5月
- 4) Chen, Min. “The Fourteenth Way of Looking at World Literature: A Case Study of Shijing.” Paper Submission to IWL’ s special issue in *World Literature Journal* (2018)

【学会発表】

- 1) Nakachi, Sachi. “Yone Noguchi’s Haiku Poetics and His English Haiku.” Hawaii International Conference on Arts and Humanities. 2017年1月8日
- 2) Chen, Min. “How to ‘read’ a painting?: Inter-disciplinary Approaches to Arts” 都留文科大学大学院英語英米文学専攻大学院講演会 研究発表、2017年 2月10日
- 3) Chen, Min. “Laurence Binyon and the Curated China in the British Museum: Sources of Inspiration for Ezra Pound Reconsidered.” The 6th CAAP (China/American Association for Poetry and Poetics) Convention, Kunming, China (November 3-5, 2017)

ここをクリックすると、一覧に戻ります！

平成 29 年度 学術研究費等交付金 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 31 日

研究者	氏名：日向良和		職位：准教授
	所属(学科等)：情報センター		
研究課題名	地域情報のデジタル化と発信。Wikipedia タウンの開催		
研究年度	平成 29 年度 から		平成 29 年度まで
研究費の種類	重点領域（地域貢献）	交付額	670,000 円
研究費の種類		交付額	円
研究概要等			
【研究概要】 地域の情報は図書館や博物館に蓄積されているものと、街にあるさまざまな建物や事物双方により構成される。Wikipedia タウンはこれら地域の情報を一般市民や観光客が、街あるきをおこない、その後撮影した写真などと共に、図書館などにある書籍から情報を抽出して、世界的なウェブ上の百科事典である Wikipedia に記事として記述することを目的としている。また地域情報の発信や観光ツアーとしての可能性もあり、全国で年間 100 件以上が行われている。日向研究室では 3 年前よりこの Wikipedia タウンに着目し、Wikipedia タウン都留を 2 度開催してさまざまな都留市の情報を発信した。今年度 Wikipedia タウン都留を行う予定であったが、日向が入試管理委員長のため後期に行うことができなかった。かわりに、7 月に甲府、山梨県立図書館にて熟練したウィキペディア編集者を関東、東海、北陸より招き、編集技術の講習と、山梨県情報の発信（山梨のワイン、謝恩碑、山梨県庁旧館を予定）を目的とするウィキペディアタウン講習会を開催した。こちらにはアメリカのウィキメディア財団より研究補助をいただいている。ウィキペディアには記事の作成にあたり、資料の選択や、情報の選択にルールがあり、参加者は山梨県の記事を作りながら、熟練者のノウハウを学ぶことができた。全国より 10 名のウィキペディア熟練者および、23 名の一般見学者があった。また日向研究室ではポスターを作成し、県立図書館の来館者に PR をおこなった。 さらに、昨年度末に訪問した福岡県福智町でのウィキペディアタウン開催を支援し、山梨で研究したメソッドを、別地域（山間地、人口減少地）で応用した。6 月より福智町図書館職員と連絡を重ね、ウィキペディア熟練者の紹介、記事の決定、まち歩きルートを選択などに助言を行いながら観察した。観察の結果、関東、関西地区ではウィキペディア熟練者などの講師を探すことが容易であるが、九州、四国、北海道では他地域から呼ぶ必要があり、コストがかかることがわかった。また、講師役のウィキペディア熟練者については事前の打ち合わせが難しい場合が多く、とっかかりとなる、信頼できるウィキペディア熟練者を紹介することが重要だということがわかった。 【学会発表、書籍収録等】山梨県立図書館一階でポスター展示			

[ここをクリックすると、一覧に戻ります！](#)